

さくらんぼ・歴史・文化
郷土の宝をさらなる誇りと自信に

さくらんぼは市民の誇り(プライド)

今年6月14、16日の3日間、山形県寒河江市の姉妹都市であるトルコ共和国ギレスン市から22人の使節団が寒河江市を訪問した。さくらんぼの国内主要産地として知られる寒河江市と、さくらんぼの原産地とされるトルコ・ギレスン市との姉妹都市締結25周年を記念する訪問団で、一行はギレスン市長ケリム・アクス氏および市議会議員団に、ギレスン県知事ドウルスン・アリ・シャーヒン氏まで加わる大デレグレーション。一行が到着したJ.R左沢線・寒河江駅前のみこし公園では、寒河江小学校・飛龍太鼓の歓迎演奏が行われ、多数の市民がトルコ共和国の小旗を振って歓迎した。

6月15日には姉妹都市締結25周年記念式典が開催され、両市長による友好宣言への署名が行われたほか、訪問団は翌16日開催の寒河

江市名物イベント「全国さくらんぼの種吹きとばし大会」にも参加。まさに寒河江のさくらんぼのように、実り多い25周年記念イベントとなった(寒河江市からは5月に16人の使節団がギレスン市を訪問。慈恩寺舞楽団が国際ギレスンフェスティバルに参加し、好評を博している)。

ちなみに現在、さくらんぼの種を参加者が口から吹き飛ばす類似イベントは各地で行われ、人気を集めているが、その発祥地は寒河江市だ。寒河江市の種吹きとばし大会はスケールも大きく、今年は5月3日～6月12日まで、寒河江市での本番のプレ大会の意味合いも込めて、全国9都市11会場にて全国キャンペーンが開催され、約8000人も参加者があつた。中でもそのハイライトとなったのが、大阪市で開催された「やまがた寒河江フェア」(5月15、20日)での種吹きとばし大会。吉本興業主催「大阪よしもと47ご当地市場」の一環として実施され、寒河江市が普及

に力を入れていくさくらんぼの高級品種「紅秀峰」のPRキャンペーン(佐藤市長のトップセールスも含む)としても大成功を収めた。

また、平成14年開催の全国都市緑化フェアを受け継ぐ「花咲かフェアINさがえ」が10周年を経過したことを契機に、「ゆめタネ@saga」として大幅リニューアルを図り、さくらんぼシーズンに合わせた30日間、実に前

さとうひろき 佐藤洋樹 寒河江市長



年度比1.5倍の集客を得た。

さらに6月1日には寒河江・西村山地域123kmのコースを自転車で疾走する「第1回ツール・ド・さくらんぼ」が、また同23日には「第2回寒河江さくらんぼウォーク」(寒河江川コース6km、慈恩寺コース10km)がそれぞれ開催され、多くの参加者を集めた。そのほか、仙台市交通局と福島交通のバス路線では寒河江市の名刹・慈恩寺や寒河江市のイメージキャラクター「チェリン」などが全面装飾されたラッピングバスを走らせる(今年5月1日～来年3月末)など、「日本一さくらんぼの里・寒河江」を多角的にアピールする事業が目白押しとなった。

これら一連のさくらんぼにちなんだイベントやPR活動には、さくらんぼ狩りのために全国から観光客が多数集まる観光さくらんぼ園の開園時期(6月上旬から7月中旬まで)、すなわち寒河江市における「さくらんぼ観光シーズン」の幕開けからたけなわの時期に行うことで「寒河江のさくら



今年から始まった「ツール・ド・さくらんぼ」も大好評



寒河江市の新たなさくらんぼの高級品種・紅秀峰

さくらんぼのもぎ取りができる観光さくらんぼ園(6月～7月)



全国各地で行われている「全国さくらんぼの種吹きとばし大会」

「現在、寒河江市のまちづくりの指針として実現に取り組んでいる『新第5次寒河江市振興計画』は、策定の際に市民の皆さんから

紅秀峰と新ブランド米「つや姫」

「現在、寒河江市のまちづくりの指針として実現に取り組んでいる『新第5次寒河江市振興計画』は、策定の際に市民の皆さんから

(山形県)



新ブランド米つや姫の栽培団地「つや姫ヴィラージュ」

品質・良食味という特徴を確固たるものとするため、つや姫の栽培は生産者を一定要件の下に認定された農家に限定すると同時に、栽培方法も「有機栽培米」「特別栽培米」に限定するなど、栽培技術の徹底化が図られてきた経緯がある。寒河江市ではさらにこの「ブランド米の最高品質化」を目指すべく、土壌要件の近い水田で統一した肥培管理を行うなどの取り組みを推進するため「栽培の団地化」を実施している。

「その団地は特定の大規模農家を柱にして、市内南部地区に「つや姫ヴィラージュ」（注）ヴィラージュはフランス語の村」と名付けて

寒河江市民の もついの象徴「慈恩寺」

このつや姫の高品質化を基盤とする栽培面積・生産量の拡大が順調に進み、やがて栽培技術の普及が進んで寒河江市全体に及ぶころには、規模の小さな兼業農家においても「紅秀峰&つや姫」を両方栽培できるといような理想的な新経営モデルを実現しているかもしれない。

昨年5月に開村されました。つや姫を栽培するだけでなく、つや姫ヴィラージュでは良質米の生産に向けた土づくりの運動の展開や、地域住民や小学校を巻き込んだ「つや姫サポーター」の育成や交流など、つや姫のブランド化にまつわるさまざまな情報発信活動の拠点ともなっています（佐藤市長）



流鏝馬や大鍋フェスティバルでにぎわう「寒河江まつり」(9月中旬)のハイライトは、神輿の祭典(寒河江八幡宮)

ところで先ほど寒河江市民が参画し、市民協働で作上げたという「新第5次寒河江市振興計画」の話題に触れた。同振興計画の掲げる将来都市像は「夢集い人・緑輝くさくらんぼの都市寒河江」であり、まさに市民の「さくらんぼ愛」が濃厚に表現されている。こうした郷土のイメージ的な象徴としてのさくらんぼとはまた別に、寒河江市民にとって、郷土の深い歴史・文化を象徴してやまな

い存在に名刹・慈恩寺がある。

寒河江市の自然の象徴ともいえる、朝日山系を源流とする清流・寒河江川(約3km先で最上川と合流する)を見下ろす、出羽丘陵の西端・葉山南裾の段丘上に位置する慈恩寺は、寺伝では8世紀(奈良時代)の創建。その規模や来歴の深さを含めれば、東北地方を代表する古刹の一つに数えられる。現在は慈恩寺弥勒堂を含め3カ院17坊から成る「一山寺院」(全山が寺域)であるが、江戸時代の最盛期には3カ院48坊の規模を誇っていたという。



昨年からは始まった「さくらんぼウォーク」には老若男女が参加(慈恩寺三重塔前)

峰といわれてきた、果肉が柔らかくジューシーな佐藤錦とはまた違った味わいの特徴を持つ品種で、果肉が硬く食感がよく甘くて、日持ちがいい。生産時期も6月が旬の佐藤錦、6月下旬から7月が旬の紅秀峰と、出荷時期の棲み分けができています。佐藤錦は寒河江市のさくらんぼ農家においても主力品種だが、今後は

さまざまな意見やアイデアをいただき、まさに市民協働で作上げたものだという自負があります。中でもさくらんぼをイメージしたまちづくりや観光振興は、市民の大きな期待が寄せられたポイントでした(佐藤市長)

現在、日本一ではありませんが、品質では日本のトップクラスを常に維持している自負がある」と佐藤市長はいう。

前出の紅秀峰は中でも寒河江のさくらんぼの最高峰に位置する品種だが、米作においては平成22年秋、山形県の新ブランド米としてデビューした「つや姫」の人氣が今急上昇中だ。

「私が全国でトップセールスする場合には、紅秀峰と併せてつや姫のPRも常に行っていますが、今後は、紅秀峰の栽培面積や生産量の増大化による『紅秀峰の里づくり』への試みとともに、高品質・良食味という、つや姫の特徴を最大限生かすような限定的な生産方式を導入・拡大した『つや姫の里づくり』にも、力を入れたいと考えています(佐藤市長)

紅秀峰はこれまで日本産さくらんぼの最高



国際見本市「フード台北」でも紅秀峰は大好評(今年6月)

こうした特徴の違いを活用することによって、佐藤錦から始まって紅秀峰へリレーするというような、高級品種の生産時期が長く続く好循環が地域全体に見込める。それが成立したときに自ずと、佐藤市長のいう「紅秀峰の里づくり」の具体的な形が見えてくるのではないだろうか。

寒河江市の農業は、一部の米作専門の大規模農家を除けば、米作とさくらんぼを両方手掛けるというスタイルが一つの経営モデルとして確立しているが、つや姫の栽培に関しては現在、厳重な規制が実施されているという。というのも、もともと山形県の方針で、高



子育てにやさしい寒河江市のシンボリック施設「ゆめはーと寒河江」(総合子どもセンター)

「3年前に策定した『新第5次寒河江市振興計画』には、地域担当職員のアシストを受けながら各地区の市民が練り上げた全8地区の地域振興計画が盛り込まれています。またそれも含めて、振興計画で掲げた全31事業・施策の進捗状況、成果への評価などについても、市民への各種アンケート調査や、公募市民を中心とするさまざまな職業・年齢の男女市民で結成した『市民100人評価委員会』などから公正かつ客観的な評価をいただけてきました。それらに加え、4月から始めた2度目の全地区巡回による『地域座談会』では、さらに市民の忌憚のない生の声を、私が直接うかがい、収集しようという試みです(佐藤市長)

こうして何重にも手厚い市民の声を得た結果、寒河江市の現在の諸事業では子育て支援への高い評価と、さらにそれをより一層推進してもらいたいという声が強かったという。寒河江市ではそうした声を受けて、今年度は医療費無料化の拡大、学童保育の拡充、第3子への支援、病後児保育など多様な保育事業の推進を早速実現している。寒河江市では市民の声がかなりダイレクトに予算に反映される仕組みが、すでに好循環を生んでいるのが分かる。

「大玉で果肉がみっちり詰まり、適度な果汁量があり、しかも甘い。果汁がいたずらに多過ぎないため日持ちもする。晩生種のため、早生種の佐藤錦とも出荷時期が共生できる」という、寒河江を新たに代表するさくら



最上川の水を引き入れた多目的水面広場はカヌーの国際規格にも準拠。豊かな河川風景は寒河江市の地域資源

とするまちづくり、慈恩寺の国指定史跡への取り組みなどを進める際の原動力「新第5次寒河江市振興計画」の成立過程で明らかかなように、寒河江市における市民協働の姿勢は徹底している。

それはすなわち佐藤市長の政治信条そのものでもあるわけだが、佐藤市長が平成21年の市長就任後、真っ先に実施したのは、全市民を対象に市内全8地区を巡回する「地域座談会」だったという。市長就任の初年度にまず全地区を回り、今年4月からは2度目の全地区巡回を行っている。

「分かります例では、季節が限定される『さくらんぼ観光』と違い、慈恩寺がより一層有名になれば通年観光の目玉になる可能性があります。しかし、慈恩寺の国指定史跡化にはそうした経済効果もさることながら、慈恩寺という地域の宝を、市民協働で徹底的に調査・研究し、顕彰していくという行為を持続的に行うことによって、市民の間に地域の魅力をより深く知る、地域の素晴らしさを客観的にも検証し確認できるなど、地域アイデンティティを強く刺激する効果があると考えています」

慈恩寺の国指定史跡化は、目下の情勢では

んほの高級品種・紅秀峰の特性は今、アジアのフルーツ王国・台湾の人々にも注目されつつある。同時にさくらんぼ原産国トルコの人々からも、日本の従来のさくらんぼの良さと、世界的に流通するアメリカンチェリーの良さを兼ね備え、万人受けしやすい高級品種との高い評価が得られているという。地域の特徴、宝ともいえるべき資源を徹底分析し、市民の声を原動力に、特質がより生かされる方向性を見極めつつ、柔軟に進められる寒河江市のまちづくりは、紅秀峰の特性ともよく似ている。

(取材・文 遠藤 隆)

慈恩寺は撰関家・藤原氏の荘寺でもあったことから、古来、中央貴族との関係が深く、中央の一流仏師の製作による、主に平安期以降の仏像の宝庫でもある。

そのため観光資源としても重要な役割を果たしてきた。しかし、その歴史的・文化的重要性に比較すると、それにふさわしい全国的知名度を樹立しているとは言い難い。コアな歴史ファンには非常に評価が高いのだが、全国発信が立ち遅れてきたことは否めない。

そんなことから前述「新第5次寒河江市振興計画」においても、市民および行政の声が



慈恩寺は国指定文化財の宝庫。トルコでも人気を博したエキゾチックな舞楽はまさに天上の舞

一致して、「慈恩寺」悠久の魅力向上プロジェクト」が、重大プロジェクト事業の一つに掲げられた。

その柱となるのが現在、国や県からの助成も受けながら進められている「慈恩寺の国指定史跡に向けた取り組み」だ。国指定史跡となるためには、さまざまな要件がある。その価値を裏付けるための院坊所蔵の文化財の調査、出羽三山の修験道とは異なる独自の慈恩寺修験についての調査研究、各建造物や墓石から山域の植物調査に至るまで、慈恩寺のすべてを、従来の調査・研究・評価にも増して徹底的に行わなければならない。

その成果や現況報告は『慈恩寺Times』という隔月の広報紙で随時公表されているが、慈恩寺の国指定史跡化への努力には「さまざまな要因がある」と佐藤市長は語る。

「分かりやすい例では、季節が限定される『さくらんぼ観光』と違い、慈恩寺がより一層有名になれば通年観光の目玉になる可能性があります。しかし、慈恩寺の国指定史跡化にはそうした経済効果もさることながら、慈恩寺という地域の宝を、市民協働で徹底的に調査・研究し、顕彰していくという行為を持続的に行うことによって、市民の間に地域の魅力をより深く知る、地域の素晴らしさを客観的にも検証し確認できるなど、地域アイデンティティを強く刺激する効果があると考えています」

慈恩寺の国指定史跡化は、目下の情勢では



遊び心と食の楽しさで連日家族連れでにぎわった「花咲かフェスティバル2013ゆめタネ@さがえ」

これまでにご紹介した、さくらんぼを象徴

寒河江市政の原点は市民の声

これまでにご紹介した、さくらんぼを象徴